

人形姫

山本幸久

第九回

9

「いこだ」

目的地に辿り着くと、森岡恭平は安堵のあまり、声にだして言うていた。代官山だいかんやま駅から記憶だけを頼りに歩いてきたのだが、まさか迷子になったのでは、と不安でたまらなかった。ひとりならまだしも、子どもを三人、引き連れていたなおさらので尚更である。

フィギュア事業部を訪れるのは一年に一回あるかないかだ。最後に訪れたのは一昨年の冬で、町はクリスマス一色だったのでよく覚えていた。そのときも少し迷った。大通りから入るのに目印だったオシャレなカフェが、友々家ゆうゆうやとかいう井物のチェーン店になっていたせいだ。その友々家の角を曲がって狭い舗道を進んでいくのだが、これまた右に左にと折れていかねばならない。つまりもともとわか

りにくい場所なのだ。まわりにパーキングもないし、狭い舗道は一方通行だらけなので、車だと余計に迷う。なので電車を利用せざるを得なかった。それでも渋谷しゅがや駅からだと歩いて十五分、代官山駅あるいは中目黒なかもぐろ駅からだとどちらも十分ちよつとかかった。バス停が近くにあり、渋谷駅から都バスに乗るといいう行き方もなくはないが、それもなかなか面倒だった。

なんでこんなところに事務所、借りたんだ、アイツは。

そうは思うものの、弟に文句を言ったことはない。弟の慎次しんじがすることはなんであれ、面白くないが、口にだして言うことはほとんどなかった。それでも弟は気づいているはずだが、むこうも黙っている。いちいち波風立てても意味がないからだ。

「メッチャかっこいいビルだなあ」井上くんが目の前の建物を見上げて、スマートフォンをかまえた。どうやら写真を撮っているらしい。「映画にでてくる秘密基地みたい」

言わんとすることはわかる。どこからかロケットや戦闘機がでてきても不思議ではないカタチなのだ。

「おまえ、スマートフォン持ってたのか」

「じゅ、塾と習い事で帰りが遅くなるから、去年、買ってもらったんだ」

荒川くんとがに答めるように言われ、井上くんはビクつきながら答え

た。

「これも自社ビルなんですか」子どもらしからぬ質問をしてきたのは田島さんだ。

「ちがうよ。ここは五階建てで、ウチのフィギュア事業部は一階から三階までのフロアを借りているんだ。もうじき一時になる。中に入ろう」

小学五年生、いや、四月になったので小学六年生となったこの三人が鐘撞市かねつきの森岡人形本社を訪れたのは十日前だ。フィギュア事業部に見学にいかせてほしいと直訴され、恭平はその場で東南アジアの某国にいた弟の慎次に電話をかけて了解を得た。そのときは慎次からの提案で、週が明けて、つぎの月曜の午後一時にいくはずだった。ところが慎次が某国で足止めを食らい、一週間延期となり、四月初日の今日になった。

昼間の一時に会うのはおなじで、今朝は十時半に鐘撞駅に集合したのだが、田島さんは母親の運転する車で訪れた。

恭平くん、娘をよろしくね。

田島さんの母親は恭平の元カノだった。とは言ってもつきあっていたのは高二的夏から秋にかけての三ヶ月である。つい先日、電話で話したものの、高校卒業以来で、ほぼ二十年振りだった。すっか

り大人の女性で、母親になっていた。そして母子で並ぶとそっくりなのが、よりいっそうわかった。

じつは溝口真純みぞぐちますみもいっしょに訪れるはずだった。半年ほど前まで、フィギュア事業部のバイトだった彼女がいれば迷わず辿り着けるたどと思っていた。ところが今朝、自宅のガレージでローイングマシンを漕いでいる最中、溝口からスマートフォンに電話がかかってきた。

じつはいま、動物病院におりまして。

溝口は阿波三姉妹あわの長女、須磨子すまこの一軒家に住んでいた。二階の一室を間借りしているのだが、他にも同居者がいた。ひとではない。猫だ。それもウチ猫五匹、通い猫七匹もいる。そのうちの一匹が昨夜からお腹を下しているというのだ。

須磨子さんにいってもらえばよかったのに。

いっしょにきています。自分ひとりでは心配だからついてきてほしいと泣かれちゃったんです。

溝口が小声なのは病院のトイレから電話をしているからだだった。週明けで思ったよりも病院が混んでいて、二時間待ちは確実なんです。おっかけ伺うかがいますので、ほんとにすみません。

結局、溝口は約一時間半遅れで、鐘撞駅を出発した。それでもきってもらったほうが助かる。見学が済んだあと、恭平はフィギュア事業部に残って、弟と打ちあわせがある。溝口には子ども達を連れて

帰ってもらわねばならないのだ。

「おい、あれ、見にいこうぜ、井上」

荒川くんが井上くんの腕を引つ張って、玄関口の壁際へ向かう。そこに設置したガラスのケースの中に、食玩しょくがんが飾ってあるのが見える。一昨年しつねんの冬に恭平が訪れたときにはなかったはずだ。

「いままでの『オバケデイズ』のが、ぜんぶ揃ってんじゃないか」

「ほんとだ」

「井上くん、荒川くん」田島さんが鋭い声をふたりに飛ばす。「勝手な行動は森岡さんの迷惑になるでしょ」

本社に寄贈される『フィギュアキング』の誌面では見るものの、実物を目の当たりにする機会はあまりない。いきつけのコンビニにあっても、さすがに自腹を切って買うのは癪しやくなのだ。迷惑どころかできれば自分も見たいくらいだ。しかしここは田島さんに従うべきだろう。恭平は少年ふたりにこう言った。

「その食玩は帰りにでも見ればいいんじゃないかな」

「たしかにそうだ。井上、あとで見ようぜ」

「あ、うん」

受付はとくにない。ただし玄関口の奥にあるドア横に電話機があり、『森岡人形フィギュア事業部に御用のある方は受話器をお取りに

なりお話しください』と記したカードが添えられていた。

これを無視して入っていき、若いスタッフに「どちら様ですか」と呼び止められたことが何度かあった。「関係者以外、立ち入り禁止ですよ」と咎められたこともある。このときはさすがに弟がそのスタッフを叱っていた。ただし薄ら笑いを浮かべながらだった。

なんにせよ、ここを訪れるのは一年に一回あるかないかなのだ。たとえ社員であっても、社長である恭平の顔を知らないのはやむを得ない。しかし子ども達の前で、それをやられるのはまずい。社長としての威信に関わる。数秒のあいだ、考えを巡らせた末に、受話器を取ろうとしたところだ。

「これ」田島さんがカードを指差す。「あたしがやってもいいですか」「そりやま、かまわないけど」

恭平が答えるや否や、田島さんは受話器を左手に取り、耳に当てる。プルルルと呼びだし音が洩れ聞こえてきた。やがて相手がでると、田島さんはハキハキとしたアナウンサーみたいな口調で話しはじめた。

「わたくし、午後一時からの見学を約束いただいた鐘撞市立第三小学校の田島芽依めいといいます。フィギュア事業部部長の森岡慎次さんはいらっしゃいますでしょうか。はい、そうです。おなじく鐘撞市立第三小学校の井上に荒川、そして森岡社長もいます。はい。わか

りました。ここでお待ちしています。よろしくお願いします」

「おまえ、そういうの、どっかで習ってんの？」

受話器を置いた田島さんに、荒川くんがすかさず訊ねた。おなじことを恭平も思っていたところだ。

「こんなこともあるうかと、ユーチューブを見て練習してきたの。荒川くんも騒々そうぞうしいだけで、なんの役にも立たない中身空っぽのユーチューバーの番組ばかり見てないで、もっと有効活用したほうがいいわよ」

「中身空っぽってことは」荒川くんはなにか言い返そうとしたが、ドアが開き、中からでてきたひとを見るなり、目をまん丸にして、言葉がつづかなかった。田島さんと井上くんもおんなじ顔になっている。恭平もだ。

「社長、おひさしぶりです」

きめ細やかなレースとひらひらとしたフリルをふんだんにあしらった、ドレスっぽいがスカートの裾は膝が見えるか見えないほどの、黒を基調とした服を着た女性が、恭平にぺこりとお辞儀をした。メイド？ ちがう。ゴスロリというヤツだ。おひさしぶりですと言うからには、どこかで会っているにちがいない。以前、ここを訪れたときか。

「去年の十月、お会いしたんですけど」恭平が戸惑っているのを、

相手は察したらしい。「わかんなくて当然ですよね。あたし、あのとき喪服でしたし」

あつ。

「人形供養のときか」

「はい。服部はつとりです」

鐘撞市内の寺でおこなった人形供養にフィギュア事業部から十人、訪れていたのだ。そのうちのひとりだったらしい。

「すまん、気づかなくて」ひとまず詫わびたものの、名前を聞いてもピンとこなかった。「その格好で働いているのかい」

「こういうのを百着ぐらい持っているんですけど、休日しか着られないって職場でボヤいてたら、うしろを通りかかった部長が、明日からでも会社に着てくればいいって、許可してくれたんです。今日はいちばんのお気に入りを着てきました」服部はその場でぐるりとまわった。「どうです?」

「素敵だと思います」田島さんが言った。お世辞ではないにせよ本心ではなからう。その表情は戸惑いを隠し切れていなかったのだ。それでも服部は「ありがと」とうれしそうに答えた。

「あなたがさつき、受付の電話をしてきた田島さんね」

「はい。今日はよろしくお願ひします」

田島さんが真つ先に頭を下げる。井上くんと荒川くんもそれを真

似てから、それぞれ自分の名前を言った。

「森岡人形フィギュア事業部によるこそ。本日、みなさんの案内役を務めます服部です。玩具メーカーやアニメ会社、専門学校からの見学はときどきあるのですが、小学生をお招きするのは今日がはじめてです。どうぞ楽しんでいってください。まずは我が事業部部长の森岡にお会いいただけます。どうぞこちらに」

服部はにっこり微笑むと、ドアをさらに大きく開き、子ども達を招き入れた。恭平はそのあとを付いていく。

「広いなあ」

井上くんの言うとおり、広々としたオフィスだ。そのうえ高い天井に大きな窓のおかげで開放感があった。二十くらいあるデスクはむきがバラバラだ。好き勝手に置いてあるようだが、弟に聞いた話だと、専門家に任せて、スタッフそれぞれがストレスにならないよう、レイアウトをしているらしい。どんな専門家かはわからないが、言われてみれば動線はきちんと取られており、幅があつて、歩きやすかった。

鐘撞市の本社は、狭いうえに荷物をあちこち置きっ放しのために、身体を横にしないと通れないところばかりだ。そもそも代官山のここは一階から三階まで合計した床面積が、鐘撞市の本社の四倍だっ

た。こういう計算をしている段階で、自分が情けなくなる。

ここを滅多めったに訪れないのは、弟の凄さを見せつけられるからだ。

同時に自分の器の小ささと心の狭さを思い知らされるのも嫌でたまらなかった。部長室はいちばん奥で、けっこう歩かねばならない。

これがまた恭平には不愉快だった。

「すげえ、なにあれ？」

荒川くんが言った。だれかに訊ねたわけでもなさそうだ。だがそれに井上くんが律儀に答えた。

「3Dプリンターだよ。いまは3Dデータを制作するためのツールがけっこう進歩しているからね。3Dプリンターでもハイクオリティなフィギュアをつくるのが可能なんだ」

「なに言ってるんだかわかんねえよ」

荒川くんが不服そうに言う。恭平もイマイチ、わからなかったくらいだから仕方あるまい。

部長室が見えてきた。ガラス張りで中が丸見えである。

部下に隠し事はしたくないんでね。

弟本人からそう聞いて、恭平は思わず笑ってしまった。自分の部屋に家族さえいれようとしなかった引きこもりだったくせに、と思ったのだ。ところが肝心の弟が見当たらない。まさか留守ではあるまい。べつの階にいるのだろう。トイレにでもいつているのか。

服部に訊ねようとしたところ、彼女のほうから「マスマチちゃんは
どうしました？」と訊ねてきた。「昨日の夜にもらったメールには、
彼女もくるって書いてあったんですけど」

マスマチちゃんが溝口だと気づくのに恭平はほんの少し時間を要し
た。

「急な仕事が入って」下痢げりをした猫の話をおぼろげにすることもなか
ろう。「二時半過ぎには着くはずなんだ。きみは溝口さんと仲がいい
のかな」

「いっしょのチームで『オバケデイズ』の食玩の原型をつくってい
ましたから」

「ほんとですか」「マジで？」

「静かにっ」井上くと荒川くんが揃って声をあげると、すかさず

田島さんが注意した。「働いているひとに迷惑でしょ」

「平気よ、そんならいの声」服部が宥なだめるように言う。「このス
タッフはみんな、なんか聴きながら作業してるんで、だれも気に留
めないわ」

実際、スタッフはひとりも子ども達に目をむけずに、黙々と仕事
をつづけている。それでも田島さんに叱られたからだろう、井上く
んが声を潜めてこう言った。

「お姉さん、『オバケデイズ』の食玩の原型をおつくりになっていら

っしゃるのですか」

「いらっしゃるわよ」服部は歩く速度を少し緩めながら答えた。「より正確に言うと、フィニッシャーと言って、原型のコピーに塗装する係なんだけど」

「デコマスをつくっておられるんですね」

声量は変わらないが、井上くんが興奮しているのはわかった。

「デコマスってなんだ」

「デコレーションマスターの略だよ。彩色見本のためにつくられたフィギュアで、工場ではこれをもとに色付けがおこなわれるんだ」

荒川くんの質問に、井上くんが丁寧に答える。

「マスマちちゃんというのは溝口さんのことですよね」

田島さんが言った。服部がメールの話をしたときに気づいたのだろう。

「そーいや、あのひと、ここでバイトをして『オバケデイズ』の食玩をちよっと手伝っていたって言ってたよな」これは荒川くんのだ。

「ちよっとどころじゃないわ」

服部がぐるりと百八十度回って、子ども達とむきあう。みんなの足が止まる。恭平もだ。

「マスマちちゃんは原型師のアシストをしてたんだけど、腕がよくってね。最終的にはひとりで任されるようにもなって、このまま原型

師として働いたらどうかって勧めていたのにさ」服部の視線が子ども達から恭平に移る。それに釣られて、子ども達も恭平を下から見上げた。「人形供養のあとの慰労会で、日本人形をつくりたいって、社長に直訴じきそしたのがきっかけで、マスマちゃんは本社で働くことになったんですね」

「うん、まあ」なんだか恭平は後ろめたい気持ちになり、慌てて言い添えた。「あくまでも溝口さん本人の希望だ。彼女がつくった雛人形を見せてもらったんだが、とても完成度が高かったし、本社で働いてもらうことにしたわけさ」

事実だ。それなのに服部だけでなく、小学生三人の視線を浴びているうちに、言い訳をしているみたいな気持ちになった。

「マスマちゃん、元気にやってますか」

「元気だ。人形をつくる腕はたしかで、大いに助かっているさ」

「だったらいいんですけどね。ここんどこ連絡が途絶えてて、ずっと心配してたんです。昨日のメールはお正月以来でしたし」

そう言ってから服部はまた百八十度回って歩きます。本気で溝口が心配だったのは、その口ぶりからわかった。自分のことを心配してくれる友達など、いまの恭平にはひとりもない。なお言えば自分がいなくなったとて、森岡人形は潰れることはない。いままでどおり運営していくだろう。

なんで俺は五代目なんか継いじやったんだ？

部長室はもう間近だ。ガラスのむこうに慎次がいた。遠くからだと見えなかったのは、ローイングマシンを漕いでいたからだ。

なんでおまえが？

スポーツ嫌いだった弟がこの二、三年、トレーニングジムに通っているのは知っていた。だが部長室でローイングマシンを漕ぐ姿を見たのは今日がはじめてだ。そんな彼を小学生三人は物珍しそうに見ている。

「あれって、いつもやってるの？」

ガラス張りの部屋の手前で、恭平は服部に訊ねた。

「一ヶ月くらい前からです。ただまあ、社長もご存じかと思えますが、部長は出張で海外を飛び回っていることが多いので、毎日やっているわけではありません」

「どうしてここで？」

「他人の目があつたほうがつづけられるからと、おっしゃっていません」

スタッフはみんな、デスクにむかって黙々と働いているのだから、他人の目もないだろうと思う。するとそれを察したかのように服部は小声で付け加えた。

「来客があると、その十分前からはじめるんですよ」

なにやっつてんだかコイツは、とTシャツに七分丈のパンツの弟を見ながら思う。

ローイングマシンは最新型だった。それも恭平もネット通販で見つけて買おうとしたが、十五万円以上もして、散々迷った挙げ句に諦めた代物である。六月に開催される関東マスターズレガッタに、社員の熊谷良隆くまがいよしたかとダブルスカルで参加することになり、自宅でもトレニングをする必要があったからだ。やむなく高校時代にお年玉で買い求めたのを物置から出して、自宅のガレージでトレニングを重ねている。週末には曳抜川ひきぬきがわで鐘撞高校ボート部の現役生をコピーしながら、良隆とダブルスカルを漕いでいた。

なんのためにおまえは、十五万円もするローイングマシンを漕いでいるんだつうの。

「トーキョーローカルサイキックだ」

井上くんがぼそりと言ったのが聞こえた。弟のTシャツには着物っぽいのが、露出の多いドレスを着た若い女性がプリントしてある。これこそトーキョーローカルサイキックというアメコミのヒロインなのだ。彼女のフィギュアを制作してほしいと、アメリカ本国の出版社から弟は依頼されていた。そして新進気鋭の人形作家、桜井桃枝さくらいももぢに協力を仰いだところまでは恭平も知っていた。だがこれは弟ではなく桜井桃枝から聞いた。それも二ヶ月以上前のことである。

あの話、どうなったんだろ。ポシャっちゃったのかな。

それならそれでいい。

じつのところ、依頼云々うんぬんは弟の嘘ではなかったのか、と恭平は疑っていた。どうしてそんな嘘を？ 桜井桃枝を呼びだすためだ。これを口実に彼女を口説こうとしたのではないか。もちろんこんなことを弟に問ただい質す気はさらさらない。嘘だったとしても、弟が正直に言うはずがないからだ。

「これってぜんぶ、森岡さんが子どもの頃から買い集めたものなんですよね」

井上くんが言った。ガラス張りのスタッフ側と反対の壁には、端から端までコレクションケースが数台、きれいに納まっており、その中には大小様々のフィギュアが陳列してあった。

恭平はお年玉でローイングマシンを買ったが、弟の慎次はフィギュアを買っていたのだ。引きこもりになる前から友達がおらず、どこかに遊びに行くこともなかったので、小遣いはすべてフィギュアに費やしていた。高校を中退して、親父の手伝いをしていたのも、フィギュア欲しさだったにちがいない。

「なんできみ、そんなこと、知ってるの？」質問しておきながら、弟の慎次は井上くんの返事を待たずに言葉をつづけた。「そっか。『フ

イギョアキング』に載ってたぼくのインタビュー、読んだんだね」

「はいっ。この部屋の写真も載っていましたし」

その記事ならば目を通していたが、恭平は言わずにおいた。井上くんの顔は真つ赤だ。あまりに興奮して、上気しているのだ。さらに鼻は膨らみ、目が爛々と輝いていた。恭平にとって慎次など癪に障る弟に過ぎない。だが井上くんには憧れの人物で、こうして言葉を交わすだけで夢心地にちがいない。余計な邪魔はしないほうがいいだろう。

恭平とおなじことを思っているかどうかはわからないが、ふたりの小学生も口を閉ざしたままだった。ただし田島さんは背筋をピンと伸ばし、手を載せた両膝をぴったりつけているのに対し、荒川くんは部屋中をきよろきよろと見回して、落ち着きがなかった。

部長室は広い。本社の社長室の倍は確実にある。本社のソファは昭和末期に購入した年代物で、中のクッションもバネもだいぶくたびれており、十分も座ればお尻が痛くなってしまう。だがここのは、ふかふかで座り心地抜群だ。ひとり掛けのが十脚あって、いまは慎次に恭平、服部、そして小学生三人の六人で、脚の短い円卓を囲んでいた。

「ここにあるのは森岡さんのお気に入り、もっとたくさんのフィギュアが、三階の倉庫に保管してあるって」

「マジかよ」

呟つぶやきを洩こぼらしたのは荒川くんだ。どうやら思ったことがすぐさま口にでるタイプらしい。

「森岡さんみたいになるためには、やはりこれだけの数のフィギュアを集めなければならないのでしょいか」

井上くんが真顔で訊ねるのを聞き、恭平も危うく荒川くんのように、マジかよと言いかけ、咳払いをしておまかした。

「ぼくみたいってなに？」慎次は満更ではない笑みを浮かべ、聞き返した。「きみはどんなふうになりたいわけ？」

「それはあの、クオリティの高いフィギュアを、つぎつぎと世に送りだしていくようなひとです」

「だったらフィギュアを集めるだけじゃなれないよ。どんだけフィギュアに詳しくても意味がない。勉強すべきなのはフィギュアじゃなくて世の中のほうだ。どんなひと達がどんなものを欲しがっているのか、それがわかってなきや、いくらクオリティの高いフィギュアをつくったところで売れやしない。なにせフィギュアはアニメや漫画、ゲームなどに登場するキャラクター人気が必要動向を大きく左右するうえ、毎年どころか、毎月、いや、毎日多種多様のコンテンツが生まれては消えていき、ニーズは多様かつ流動的だからね。それに世の中というのは日本国内だけじゃない。依然として海外に

おける日本のアニメや漫画の人気は高い。しかもアニメの場合は今後、ネット配信などで日本とほぼ同時に海外のファンも見ることが可能になる。そして関連商品の販売戦略も日本と海外、並行して進めていかなきゃ間にあわなくなっていく。より短期間でより大量の商品を、クオリティを落とさず生産するにはどうすべきかを考えねばならないってわけだ。どう？ きみにできそう？」

一気に捲まくし立てられたうえ、不意に質問を受け、井上くんは目をぱちくりさせている。そればかりか額にじつとりと汗までかいていた。

「おい、慎次。相手は子どもだぞ。そんなのわかりっこないだろうが」

「子どもを子ども扱いするのは子どもに失礼だよ。それにわかるわからないじゃない、できるかできないかを訊いているんだ」

「できるさ」そう言ったのは井上くんではない。荒川くんだった。挑むような目つきで、慎次を睨にらみつけていた。「あんたが言うように井上が詳しいのはフィギュアだけだよ。食玩ならまだしも、でっかいフィギュアを買うだけのお金がなくて、自分でつくっちゃうくらい、フィギュアが好きなんだ。だけどスポーツはからきしだし、勉強は俺とおんなじくらいできない。世の中のことはコイツには難し過ぎる。それは田島がやってくれる」

「なんで私が？」

「おまえ、勉強できるじゃん。進学塾だけじゃなくて、英会話の学校も通っているんだろ。だったらついでに世の中のこと勉強してくれよ。そして井上の夢を叶えてやってくれ。クラスみんなのために働くのが学級委員としての務めだって、自分で言ってたじゃないか」

「学級委員だったのは五年生よ。六年になったら、クラスがちがうかもしれないし。だいたい井上くんの夢って、大人になってからのことですよ。なんでそんな先まで面倒見なくちゃいけないの」

「大人になるまでずっと友達でいればいい。だからな。頼むよ」

「荒川くんはどうするのよ」

「俺はふたりを応援する係だ」

突然、笑い声をした。服部だ。堪え切れずに吹きだして笑い出したのだ。

「チョーウケル。いいキャラしてるよお、荒川くん」

「ありがとうございます」

荒川くんが素直に礼を言ったのが、さらにツボだったらしい。服部は腹を抱えて、なおも笑いつづけた。恭平も頬が緩んでしまう。

「きみはいい友達を持ったな」井上くんにむかって慎次が言った。

「羨ましくいよ」

恭平もおなじだった。三人にはぜひとも、大人になるまでずっと友達でいてほしいと願いもした。

「井上くん、森岡さんに質問があるのよね」

田島さんに促されると、井上くんは鞆から学習ノートを取りだし、あわせた両腿りょうももの上に広げた。ノートは文字でびっしり埋め尽くされている。

「それ、ぜんぶ質問かい」慎次が言った。身を乗りだして、井上くんのノートを覗きこみながらだ。

「百個くらいあったんですが、いくらなんでも多過ぎるとふたりに言われたので、三十個に絞りました。よろしいでしょうか」

「よろしいけど、まずは服部さんの案内で、社内を見学してきたらどう？ そのあと時間の許すかぎり、質問に答えるよ。それでいいかな」

「は、はい。よろしくお願いします」

「それじゃ、いこっか」

そう言って服部が立ち上がった。小学生三人もだ。恭平も腰を浮かせたところだ。

「社長も見学するんですか」慎次が訝いぶかしげな顔をする。「ちょっと話したいことがあるんですが」

溝口のことか。

「わかった」と答え、恭平は子ども達を見送って、ソファに座り直した。

溝口真純のことを、親父がよそで生ませた子ではないかと言いだしたのは頭師の宮沢だ。東京駅で倒れて怪我をした彼を見舞うために、家を訪ねたときに言われたのだ。ただしはつきりとした根拠があるわけではない。なにせ親父が好きでカラオケの十八番だおはこった歌を、溝口がよく口ずさんでいるのが怪しいと言う。その歌はだれもが知るヒット曲ならまだしも、知る人ぞ知るムード歌謡だった。

こんな偶然ありますか。

なくもないと思いますが。

恭平としてはそう答えるしかなかった。すると宮沢はべつの理由をあげた。

娘でなければ、あそこまで先代の雛人形をそっくりそのまま、つくれやしません。

それを言ったら俺だっつくれることになりますよ。

坊ちゃんをはじめるのが遅かったし、そもそも先代に直じかに教わっていませんでしょう。

溝口さんだっつて教わってませんよ。

あの子は母親に教わったにちがいありません。

母親？

三十年ほど前の春、あの子とおなじ美大生の子が、先代の弟子になりたいと何度も本社にやってきましたね。

親父は会おうとせず、代わりに宮沢や幸田こうだが追いつ返していた。季節が夏に変わった頃、遂つひに親父が折れて、週に二、三度、教えることになった。すると瞬またたく間に腕をあげ、美大を卒業してから森岡人形で雇うことになった。

雇ったってことは本社の二階で働いていたんですか。俺、そんなひと、まったく覚えがないんですけど。

当時は頭師が十人前後いて、仕事場に場所がありませんでね。その子にはひとりで暮らす東京のマンションで、頭をつくってもらっていました。ところが自動車どころか免許も持っていない。東京まで会社の車を飛ばして頭を取りに行くのが私の役目でしてね。するとある日、その子のマンションからでてきた先代と、ばったり出で会わしちまいました。

ほんとですか。

坊ちゃんにこんな嘘つくはずないでしょう。じつはこの話、ひとに話したのは今日がはじめてでしてね。そのとき先代に、だれにも言わないでほしいと頼まれまして、墓場まで持っていくつもりだったのですが。

それから三ヶ月もしないうちに、女性は一身上の都合で森岡人形を辞めて、東京のマンションも引っ越してしまい、消息がわからなくなつたのだという。

一昨日、溝口さんがウチにきたときに、生年月日を訊いたら、その子が辞めた半年後だったんですよ。これがただの偶然だと坊ちゃんはおっしゃいますか。

だけど溝口さんには両親がいるんですよ。ニューヨークへお嫁にいったお姉さんだっている。

その家族に引き取られたんでしようよ、きっと。それにね、坊ちゃん、東京のマンションで暮らしていたその子は名前がマユミだったんです。

ただしよくよく聞くと、マユミのマは溝口真純の真ではなく麻だった。麻由美という名前だったらしいのだ。

溝口さんにはその話を。

していません。まずは坊ちゃんにと、いまこうしてお話したわけ。

つまり確固たる証拠はないのだ。すべては宮沢の妄想もうそつである。だがそう言ったところで、宮沢が納得するとは思えなかった。

ではいつか機会を見て、溝口さん本人に訊ねてみます。それまでは内緒にしておいてください。

わかりました、と宮沢は神妙な面持ちで頷いた。

ところが十日前、弟の慎次に電話をした際だ。今回の件をお願いしたあと、弟がこう言ったのである。

溝口さんが俺らの妹だって、ほんと？

だからその話を聞いたのかと訊ねたところだ。

兄貴、知ってたのか。

そうじゃなくて。

そうじゃないってどういうこと？ ま、いいや。今度、会ったときにそのへんの話、聞かせてよ。それじゃ。

というわけで、恭平はてっきり溝口の話をするのかと思いきや、そうではなかった。

「まずはこれ、見てくんない？」

慎次はテーブルにタブレットを置いた。その画面の中には野原が広がっている。遙か彼方はるかまでなにもない。だが生えている草木が日本のとはちがった。少なくとも鐘撞市内には見当たらない種類だ。陽射しも強い。やがて自分がなを見せられているのか、恭平はわかった。

「フィギュア工場の建設予定地か」

「そのとおり。敷地面積はだいたい一万五千平米、約四千五百坪。」

ここに工場を二棟、従業員用の宿舎を一棟建てる予定なんだ」

そう言いながら慎次は止めていた人差し指で、画面をスライドする。青空の下に建物が三棟並んだイラストがあらわれた。二棟が平べったい直方体で、あと一棟はほぼ真四角だ。どれも洒落た装飾や凝った造型は皆無だが、天井が太陽光パネルで覆われていた。どうやら完成予想図らしい。

「俺としては一年先にはフィギュアの生産をはじめていたいところなんだけどね。建設会社が決まらず滞っているんだ。政府の高官が決定権を握っていて、俺から催促することもできなくてさ。ほんとなんちやうよ、まったくと嫌んなっちゃうよ、まったく」

森岡人形の本社と実家がある土地は百五十坪足らずだ。それでも恭平ひとりでは持て余しているくらいである。約四千五百坪もの広大な、しかも海外の土地に、どうやったら工場を建てるのができるのか、とんと見当がつかない。

「兄貴に愚痴ったところで、どうにかなるわけでもないんだけどね」
弟にすれば愚痴かもしれないが、恭平には自慢話のように聞こえた。仕事のスケールがちがい過ぎるのだ。だからといって拗ねても仕方がない。それに弟が大変なのはたしかなのだ。

「おまえはよくやってる。たいしたもんさ」

気づけばそう言っていた。独り言に近い。すると弟がエラく訝し

げな表情で、恭平をまじまじと見た。

「どうした？」

「兄貴こそどうかしたんじゃない？ いきなり俺のこと、褒めるなんて」

「褒めてなんかいない」心の声は口をついてでただけだ。つまり本心である。だがそれを言うのは気恥ずかしかった。「社長として労いの言葉をかけたただけだ」

「その社長にお願いがあるんだけど」

「なんだ？」

「近々、この工場の立地協定の調印式があるんだけどね。兄貴に出席してほしいんだ」

「どうして俺が」

「どうしてもなにも森岡人形の社長である兄貴が、合意書にサインをするのは当然だろ」

「いいよ、俺は。ここまで話を進めたのはおまえなんだから、おまえに一任する。良きに計らえだ」

「兄貴、またボートはじめたんだよな」

「どうしてその話になる？」

「この国の国王がまだ王子だった時分、留学先のイギリスの大学でボート部に所属していたこともあって、いまでも国王杯があるくらい

ボート好きでさ。国王に兄貴の話をしたら、ぜひ今度連れてきてほしいと頼まれたんだ。民主化が進んでいても、国王の威信は保たれているからね。兄貴が国王となかよくなってくれば、物事を優位に進められる。さっき話した建設会社の件だっけ？すぐさま決まるにちがいない」慎次は話をしながら、身乗りだすばかりか、どんどんと前にでてきた。このままソファから落ちてしまうのではないかというくらいだ。「頼みます、社長。会社のためなんだ」

そこまで言われれば引き受けるしかない。会社のためであれば尚更である。

「日時が決まったら教えてくれ」

「了解。マジ助かるよ」嘘ではないようだ。慎次は胸を撫で下ろしている。「それと」

「いよいよ溝口の話か。」

「このキャラのことなんだけど」

「ちがった。弟はTシャツのイラストを指差す。」

「トーキョーローカルサイキックのヒロインだろ」

「なんで知ってるの？ 兄貴、アメコミに興味あったっけ？」

「しまった。桜井桃枝に教えてもらったとは言えない。」

「日本の女子高生が主人公のアメコミがあるって、ネットの記事で読んだことがあったんだ」

「なるほどね」恭平の嘘を弟はあっさり鶺呑^うみした。「でね、じつはこのフィギュアをウチでつくることになってさ」嘘ではなかったのか。「本社で働いてた桜井さん、いるでしょ？ いまや飛ぶ鳥を落とす勢いの人形作家の彼女に協力してもらおうことにしたんだ」知っている。「前に一度、打ちあわせをしたんだけど」それも知っている。「そのときはまだ具体的な話が決まっていなくてさ」そのときの話は桜井本人に聞いた。恵比寿^{えびす}のクラブに誘って断られたんだろ。「一昨日、アメリカの出版社と仮契約をして、サンプルを制作することになってね。早速、桜井さんに連絡をして、二度目の打ちあわせをすることにしたんだ。もうじきくるのか。」

「きた」

慎次がガラス張りのむこうに目をむける。恭平もだ。

桜井桃枝がこちらにむかって歩いてくるのだが、ひとりではない。溝口が隣にいた。

「なんで？」弟が言う。溝口のことではない。ふたりのうしろに宮沢をはじめとした職人全員が、ぞろぞろ付いてきていたのだ。「なんで宮沢さん達が？」

俺も知らん。

<つづく>